



この日は、電気ミシンの直し方について。

リユースで、物が笑う

青年海外協力隊 2018 年度 1 次隊 派遣国：トンガ王国 伊藤有未（三郷市）

農業祭が終わり、職場もお休みモードに入ると思いきや、翌週よりミシン修理の講習会開催が急遽決定、同僚 2 名とともに参加することに。現在の配属先である農業省女性開発部は、私たち隊員が着任以降、主に家庭菜園の普及やクッキングデモを交えた栄養指導等に注力してきましたが、過去には女性支援の一環として、ミシンや縫い物関連のサポートもしていたようです。その取り組み再開に向けた兆しでしょうか。

いざ研修に行ってみると、数十年も前の物であろう足踏み式や手回し式のミシンから日本製の何十種類も糸切り替えが可能なコンピュータミシンまでとピンキリ。講習は、トンガ語で行われ、情けないですが理解度は 10%程度。ト



こんな古い足踏み式ミシン。日本では見たことありませんでした。まさかトンガでお目にかかるとは。

ンガに来てから先輩隊員に教わりながらトップスやスカート、ポーチ等、ミシンを使って製作していたので、予備知識はありましたが、専門用語も多く、苦労しました。たとえ理解に欠けても、自分なりに有意義な時間にしようと、聞いて分からない単語を書き留め、リスニングの練習に当てることにしました。

次々に注油して錆を取りながら分解されていくミシン。液体に浸し、再生可能となったパーツを順番に再度組み立てていきます。日本の職場で、緻密に番号が振られた展開図や部品組み立て工程表を目にすることがあっただけに、臨機応変に記憶と知識だけで、復元していく様子に感心しました。トンガの人たちは物を丁寧に扱うことは苦手で壊し上手。ですが、壊し上手は直し上手。100%でなくても、使えるまでに直す。途上国あるあるなのかもしれませんが、彼らはリユースの能力には長けているように思います。日本では、古くてみすぼらしいとか、新しいバージョンが発売されたからと使えるのに使わなくなる。物にも人間と同じように感情があるのなら、きっと彼らは悲しんでいるはずです。今回、修理を終え、新たに使えるようになったミシンは輝き、どこか嬉しそうな表情。物と向き合う、改めて物の扱い方を考える大切な時間となりました。



ちゃんと縫えるまでになりました。ミシンもどこか笑ってる。